Handexempl. T. Goto

印度學佛教學研究第42巻第2号
平成6年3月　　　　　　抜　刷

Chāndogya-Upaniṣad Ⅳ 1-3
「Pautrāyaṇa と Raikva」

後　藤　敏　文

bearbeitet 3. 1993 –
Vortrag gehalten 22. 5. 1993 (高野山大学 第44回 日本印度學佛教學會學術大會)
7. 7. 1993 Univ. Halle

Manuskript 8. 1993
1. Korrektur 4. 11. 1993
2. Korrektur 31. 1. 1994
Journal erschienen Ende 3. 1994
Sonderdruck erhalten 13. 4. 1994

maßgeblich: deutsche (ausführliche) Version bearbeitet 1.–4. 1994 (4. 1993–) für Fs. Thieme ~~1995~~ 1996
dort auch Eintragungen

(42) 印度學佛教學研究第42巻第2号 平成6年3月

Chāndogya-Upaniṣad Ⅳ1-3
「Pautrāyaṇa と Raikva」

後 藤 敏 文

1. Chāndogya-Upaniṣad［ChU］には逸話風の話が見られるが，この話はその種のものが並ぶ冒頭にある。これまで多くの翻訳に取り上げられ，LÜDERS, HAUSCHILD 等の研究があるが[1]，解釈は依然 Śaṅkara 註の場面設定に捕われていた；原文修正の諸提案はむしろ理解を歪める。改めて原文を読むと，かなり異った解釈が得られ，この Up. の意図そのものが考え直される：Mahāvṛṣa の国に Pautrāyaṇa という，布施に熱心な王がいた。彼は雁の会話を耳にして，Raikva という者が賭博に勝つ方法を知っていると信じ込む。そこで当人を捜し出し，多大な贈り物をして教えを乞うが，得たのは単なる学問 “saṃvarga-vidyā” であった。思想の中身や個々の材料は Jaiminīya-Upaniṣad-Brāhmaṇa［JUB］Ⅲ1-2に出揃っており，これに基づくと判断されるが[2]，そこには王も Raikva も登場せず，最後の謎掛け問答の部分以外は物語仕立になっていない。

2. 《Jānaśruti Pautrāyaṇa［という］信念をもって施し，沢山の施しをし，沢山の炊き出しをする者（*śraddhādeyo bahudāyī bahupākyaḥ*）があった。「［人々が］どこでも私の［食物を］食べられるように[3]」と，彼はいたるところに宿泊所（*āvasatha-*）を建てさせていた。さて，夜に雁たちが飛びよぎった。その時，ある雁がある雁に次のように声をかけた，「おいおい，ちょっと，Bhallākṣa Bhallākṣa, J°P° の昼間に等しい輝きが広がっている。それを［我々に］くっつけるなよ。それが君を火傷させないようにしろ。」》雁の群は何の上を飛び過ぎたのか？ P° の昼間に等しい輝き（*samaṃ divā jyotir*）とは何を指すのか？ これまでの解釈では，王宮の屋上に王と侍従長とが眠っていて(王が侍従長に話し掛けるので)，そこから王の徳が輝き上っており，雁はその上を飛び過ぎたとされる。仮に侍従長とした *kṣattṛ́-* は元来「料理長，(王室の)料理長官」であった。[4] LÜDERS は別の論文（註4）で，この時代には既に高位の官職名となっており，もはや料理には携わらなかったと主張するが，その典拠の一が当箇所である(：王の隣で寝ている程であるから)。しかし，〈王は宿泊施設を設けて料理を供していた〉，〈脇には『司厨

長，内膳の正』という職名の者がいた〉，〈火傷をしかねない輝きが立ち上っていた〉，という三命題からは，王が料理長（官）と共に，自ら指図して頼って来る者たちに供する食物を，夜，調理しており，煮炊きの火が燃え上がっていた，と推論される。雁の群はかかる一施設の上を通過したと考えられる。

3. 話し掛けられた雁の名 *Bhallākṣa-*は *bhadrākṣa-*「幸運をもたらす目をもった」の中期方言形と判断されるが[5]，群を先導する雁[6]の名に相応しい（「目利きさん」）。物語の主題からは，賭博用の木の実という意味の *akṣá-*も懸けられていると思われる（「つきのいい『目』をもった」）。B° が答える：《…「それはいったい誰のことを，君，そういうからには，一つ軛に繋がった[7] Raikva のように言うのかね。」》ここで初めて王の「昼間に等しい輝き」が徳・威光の輝きの意味に転じている。初めの雁には意味が解らない：《「人がどんな風なら，一つ軛に繋がった R° なんだい。」「勝ち取られた kṛta に他の下位の手（*áya-*）が集まって行くように，何であれ人々が行なう正しいことは（*sādhu kurvanti*）その人に集まって行くのだ。彼が知っている事柄を知っている人，その人のことを僕はこう言ったのだ。」》雁の言葉の（表面上の？）意味は他人の「正しい行ない」[8] が R° のものとなってしまうことにあると思われるが，王は謎めいた言葉の罠に陥る：

4. 《それを J°P° が耳にした。彼は身を起こすのももどかしく（*saṃjihāna eva*）[9]，料理長官に言った，「なんと，おい君，『一つ軛に繋がった R° のように言うのかね』と［言っ］たら，『人がどんな風なら，一つ軛に繋がった R° なんだい』と［言った］よなあ。『勝ち取られた…こう言ったのだ』［だ］と。」》「何と，おい君，…たら…よなあ」と訳した *aṅgāre'ha*[10] 以外は雁たちの言葉と全く同一である。困惑した二人の間の寝ぼけたやり取りとするなど様々に解釈されてきたが，王は賭博に勝つ方法があると思って興奮し，料理長官に向かって雁たちの会話を繰返したものと思われる。*sayugvānam iva raikvam* から繰返されるのはこの人物が鍵だからである（注7末をも参照)。誤解の基は何よりも比喩そのものにあろう。更に，*sādhu kurvanti* を「正しい行為を行なう」（注8参照）ではなく，s° のより語源に近い「目的にまっすぐ達する，成功する」意味から（賭博で）「巧い手をうつ」と思った可能性がある。最後の殊更抽象的な表現 *yas tad veda yat sa veda sa mayaitad uktaḥ*「彼が知っている事を知っている人，その人が僕によってこう言われたのだ」には何か意図が隠されているように思われる。最初の *sa*「彼」[11] が R° であれば，彼と同じ知識を持てば第二の R° となる意味になるが，王はその知識を聞き出せば賭博に勝てると思い込んだ。

5. 《その料理長官は捜し求めたのち,「見つかりませんでした」と戻っ[て来]た。彼に[王は]言った,「君,婆羅門を探す,そういうところでなら,その人に行き当たれるぞ[12]。」彼は,荷車の下で皮膚病を掻いている男のすぐ脇にしゃがみ込んだ[13]。「君がさて,貴兄,一つ軛に繋がったR°だね」と彼に声をかけた。「私がそうだ,きみぃ[14]」と認めた。その料理長官は「見つけましたぞ」と戻っ[て来]た。》場面が替わる。この物語には推移・経過を説明する繋ぎの文が極めて少ない(注13をも参照)。生き生きした会話が中心に置かれ,Br. の挿話や Up. 一般と比べ,文体・語りそのものが強く意識されている様に思われる。料理長官は何処を探したのか? 当然賭博場や博奕打ちのいそうな場所であろう。王は婆羅門 *brāhmaṇa-*(学者)を当ってみろと言う。ここに Up. から仏教・ジャイナ教興起時代へかけての重要概念「真の婆羅門」を見ようとする DEUSSEN, LÜDERS らの試みは深読みに過ぎよう。(R° が体を掻いていた理由は後述。)

6. 《すると,J°P° は,――牛六百頭,金の頸飾り,騾馬に牽かせた(乗用)車――[15]それを(全て)携えて,出向いた。彼に声をかけた,「R° よ,ここに牛六百頭,ここに‥,ここに‥車がある。君が崇めている神格,その神格を私(の為)に教え示せ。」彼に相手は答えた,「嘲笑(*ahahă*)あれ,おまえ下人よ(*śūdra*),君自身の牛達もろとも君に[16]。」すると,もう一度 J°P° は,――牛千頭,金の頸飾り,騾馬に牽かせた車,[自分の]娘――[15]それを(全て)携えて,出向いた。彼に声をかけた,「R° よ,ここに… ここに[君の]妻,ここに君が[今]座っている村がある。私を,貴兄,教え諭せ。」[R° は]その女の顔を持ち上げて自分に近づけながら言った,「[彼は]これら(牛たち)を持ってきぞ。śūdra よ,この顔だけで君は[私を]なびかせられたろうに[17]。」[R° が]彼(J° P°)のために住んだのは,この Raikvaparṇa[18] という名の,Mahāvṛṣa の人々(国)の中にある人々(地方)である。》王の初めの発言に注目されたい。あくまで賭博のことと思い込み,つきのいい「神格」を教えてくれと頼む。二度目は単に,私を教化せよ,と言(ってしま)う。そこでR° は“saṃvargavidyā”を教示する。R° は結局 P° の姻戚として国内の一地方を治めたものと思われる。

7. 《彼に[R° は]言った:「風は実に *saṃvarga-*(取り込む/まきあげる者)である。火が消え去る時には,風の中に入るのである。太陽が沈む時には,風の中に入る。月が沈む時には‥。水が乾き上がる時には‥。風がこれら全てを取り込む/まきあげる(*saṃvṛṅkte*)のだから。以上が神格についてである。次に自己については:気息は実に *saṃvarga-* である。人が眠る時,ほかならぬ気息の中にことば

(言語機能) は入る。気息の中に視覚は。‥聴覚は。‥思考機能は。気息がこれら全てを取り込む／まきあげるのだから」と。そのようなこの両者は実に *saṃvarga*-である。風こそが神々の中で，気息が生体諸機能の中で[19]。》JUB にある思想を凝縮し，各五要素を採って纏めている。注目すべきは風／気息を主語にして他動詞 *saṃ-vṛṅkte*「捩じりとって自らの下へ集める」で表現する視点の変更である。賭博用語 (「まきあげる」) が懸意されていることは明らかであろう[20]。

8.　ここで R° の話は終り，《さて，Śaunaka Kāpeya と Abhipratāriṇ Kākṣaseni とが給仕を受けている最中に，二人に学生 (*brahmacāriṇ*-) が食を乞うた。だが二人は彼に与えなかった》で始まる Triṣṭubh 二詩節による謎懸け問答の話が続く。内容は JUB Ⅲ 1-2にほぼ同様であるが，JUB では二人の学者は給仕役である (Int. *pari-veviṣyamāṇa*-[21]) のに対し，*pari-viṣyamānau* と受身になっている点が特に目を引く。これによって三人とも王の施設に庇護を求めて来た者達と解釈でき，一音節の差で P° の物語に見事に組み込まれている。[22]

作者は最後に，saṃvargavidyā「取り込み／まきあげ論」の中に現われた五神と五機能の合計十を，賭博の勝ちの手 kṛta と同置し，更にこれを食物 (*anna*-) と「食物を食べる」*virāj*- なる原理とに同置して，《人がこのように知る時，この全てはその人によって見られたものとなり，[その人は] 食物を食べるものとなる》と，「賭博と食物」という主題に添って全体を締めくくる。[23]

9.　登場人物の名を検討し，この Up. の意図を探ってみたい。王の名に近いものを Veda 文献に求めると，Jaiminiya-Brāhmaṇa [JB] に数回言及される *Nagariṇ- Jānaśruteya*- がある。この学匠は Aitareya-Br. Ⅴ 30, 15 では，Agnihotra 祭施行の刻限が「夕方に客 (旅人) を追い出してはならない」という慣習法を引用して根拠づけられる (難解な) 文脈で，ある人物の子孫の隆盛をこれに関する知識の有無に結び付けた格言を残している。「夕方に客を追い出してはならない」は Pautrāyaṇa の施設で，夜，食事が調理・提供されていたことを想起させる。物語の下敷きとなった JUB Ⅲ 巻の vaṁśa (師資相承次第) に挙げられる *Nagariṇ- Jānaśruteya- Kāṇḍviya*-も同一人物であろう：*Hṛtsvāśaya- Āllakeya- Māhāvṛṣa- rājan*-「Ma° 族の王，A° の子孫，『心に宿願 (？) ある者』」→ *Janaśruta- Kāṇḍviya*- → *Sāyaka- Jānaśruteya- Kāṇḍviya*- → *Nagriṇ- J° K°*。以下は推測ではあるが，就れも Mahāvṛṣa の国の王 (首領) の家系と思われ，同時に学匠であったことになる。*Nagariṇ*-『都邑持ち』という「愛称」からは彼の代になって都市ないし首邑を持つに至ったことが推定され，その前の *Sāyaka*-

『飛び道具』は版図拡大の為に大いに戦っていたのであろう。Pautrāyaṇa の物語の背後には当時知られていた Mahāvṛṣa の建国伝説がある様に思われる。諸部族が統合され，都市を備えた国が形成されて行く過程で，覇王達は有力な祭式専門家（知識人）を優遇し，集めたことが文献から推測されるが，この王家も伝説になる程進んだ施策を取ったのであろう。P° の宿泊所とは旅をする学者兼僧侶の為の宿泊・給食施設であったと思われる。支配階級にとって重要な賭博も国の隆盛に係っていようし，王は賭博で儲けた金をこうした施設に投資していたのかも知れない。[24]

一種の Gotra 名と考えられる *Kāṇḍviya-* は，Den. *kaṇḍūyá-*[te]「(からだの痒みを) 掻く」(YV-Saṁh. +). *kaṇḍū́-*「痒み，からだを掻くこと」(Kl.) を想起させる。この一族の王かつ学者と想定される者が[25]荷車の下で「皮膚病を掻いている」婆羅門から教えを受け継ぐという奇妙な話には，氏族名を「痒みの末裔」とする（通俗？）語源解釈への「遊び」が意図されていよう。

Raikva-は，作者が Mahāvṛṣa の国に現実にあった地方ないし部族名 *Raikva-parṇa-*（注18）に着目して，これから創作したものと思われる。*rayíḥ kvà* (*kvà rayíḥ*)「財産は何処にある／どうした？」に似た響きを利用したのであろう。[26] 王が望んだものは？　賭博で一財産稼ぐこと。得たものは？学者の家系の彼なら知っていた筈の只の学問。雁の Bhallākṣa の言葉をもう一度振り返ると：「彼（＝Pautrāyaṇa，注11参照）が知っている事柄を知っている人，その人のことを僕はこう言ったのだ」とも読める。P° の「正しい行為・手」を R° が「まきあげて」しまったとも言え，実に「目の利く」雁であったことになる。[27]

このような，パロディーとも言える「脚色作品・お話し」が真実・事実に照応した (*satyá-*) 文からのみ成り立つべき Veda 文献に収録されたことには理由がある筈だが，辻褄が巧く合い，賭博と王の施設（及びそこで供される食物）という主題で破れなく纏め上げられ，懸言葉が見事に成功しているのも一種の *satyá-* なのではなかろうか。何れにせよ，事情に通じた当時の専門家仲間に向けて語られた傑作と思われる。今回指摘し得た諸点以外にも秘密が発見できるであろう。

---

1) Lüders, Zu den Upaniṣads. I. Die Saṃvarga-vidyā (1916＝Phil.Ind. 361-390), Hauschild, Mél.Renou (1968) 337-365. 諸研究は Oberhammer/Werba, E. Frauwallner, Nachgelassene Werke II (1992) 40-43の脚注 (Werba) に詳しい。

2) Oertel JAOS 15 (1892) 249-251 は当箇所の平行版として JUB の当該部分を初

めて発表した。LÜDERS 上掲論文は JUB 版が本来の姿であることを詳しく検討している。更に FUJII JIBS 37 1002ff. 参照。"saṃvargavidyā" の一層古い形は ŚB Ⅹ 3, 3 (Dhīra と Jābāla の話) に辿られる (特に RUBEN, Beginn der Philosophie 131)。

3) *me 'tsyanti*: 可能の意味の口語的用法; この種の Fut. は K. HOFFMANN, Aufsätze zur Indoiranistik Ⅱ 371; Gen. *me* については OERTEL KZ 67 146-153参照。

4) *kṣad*「食卓に供する」の行為者名詞に遡る。LÜDERS ZDMG 99 117＝Kl. Schr. 50; RAU, Staat und Gesellschaft 110f.; GOTŌ I. Präsens 123 n. 131参照。

5) WERBA 40 n. 27参照。*bhadrá-* の語義は OLDENBERG Kl. Schr. Ⅱ 843ff. 参照。

6) 先導の雁であることは HAUSCHILD 338, 343f. が Śaṅkara 注を援用しつつ強調。しかし, 具体的な証拠は *tan mā prasāṅkṣīs* にある：aktiv 故「それをくっつけるな」(*pra-sañj*「～を～と接触・付着させる」) の意となり,「我々と」(Instr.) が省略されていると判断される。「それに触れるな」(既存の解釈) であれば reflex. Med. が求められる (GOTŌ, Münchener Studien zur Sprachwiss. 39 33 n. 32参照)。

7) *sayugvan-*: 接尾辞 *-van-* (Fem. -varī-) は (潜在的には全) 語根名詞に付せられ, 行為者名詞の機能を継承 (明確化) し, 性の表示と容易な活用とを齎す。基礎にある *sa-yúj-* は「同盟を結んだ；同行者」の意味で RV に出る。*sayúgvan-* は他に実体詞 (m.) として一例のみ：RV Ⅹ 130, 4 *agnér gāyatr$_{i}$y àbhavat sayúgvo, -$_{u}$ṣṇihayā savitā́ sáṃ babhūva*「G° は Agni の同盟者 (伴侶) となった。Savitṛ は U° と合体した」。「一つ軛に繫がった／れた」の意図する所は, 他人の「正しい行ない」の彼への移行・集中か, P° との姻戚・同盟関係 (後出) にあると思われるが明らかでない。賭博用語としての価値も当然推定されるが (LÜDERS「[賭け金を] 取り集める者, 併合者」, HAUSCHILD「取り込み屋, まきあげ屋」), 確証はない。

8) *sādhukṛtyā́-*「正しい行い」(及び動詞 *sādhú kṛ* の結果；～ *sukṛtá-*) は人がそれによって自らの中に蓄える一種の潜勢力であり, ヴェーダ文献では主に死後の天界への道で効力を発揮する。神の一員となる者は門前で全てを空にするが, その時には彼の *sādhukṛtyā́-* は父祖達に移行する。Cf. JUB Ⅲ 14, 6, JB Ⅰ 50：18ff., Ⅰ 18：17, TB Ⅲ 11, 8, 3. 4, ŚB Ⅳ 6, 8, 13. 15。Dhammapada 67をも参照。

9) *saṁ-hā*「起き上がる」(：*hā*「姿勢を変える, 身じろぐ」, cf. HOFFMANN Aufsätze Ⅱ 377) は本来, 身を起こす前の「体を縮める」動作 (家畜から発想とも) を言うと推定され, 王が眠っていた (特に LÜDERS 371) ことを意味しない。

10) *aṅga* については SCHRAPEL *iva* 47ff. 参照。*aṅga*＋*are*＋*aha* (*ha* ではなく) の解釈も同書 78 Anm. が指摘するが, *ha* は三番目の位置に来ないという誤解に基づく。*ha* と *aha* とにこの意味での差は無く, Vok. の *are*「おまえ！」が挿入されているのである。*aha* を採るのは, 軽い対比を示す場合の先行文に用いられ, 後続文には何も来ない (時に *átha*, *u*, *tú* 等) という機能 (DELBRÜCK Ai. Synt. 498) に基づく。

11) 通常の anaphora の用例なら *sa* の受け得る既述の者には王と R° しかない。

12) arccha「行き当たれ」: Ipf. *ārccha-^{t}* などから作られた二次的語幹 (cf. LÜDERS 372, 彼自身は語義を解しかね, *accha* に修正); Iptv. は可能の意味の口語的用法と解される (叙事詩などの用例は SPEYER, Ved. u. Skt. Synt. 57参照)。

13) *upopaviveśa* の前置詞重複の用法については BÖHTLINGK/ROTH s.v. *viś*＋*upopa* (殊

に ChU Ⅰ 10,8, Ⅳ 6,1), 更に DELBRÜCK Ai.Synt. 55 (例えば *upáry-upari*「真上に」) 参照。JANERT KZ 71 108, HAUSCHILD 353 の「恐る恐る, ゆっくりと (近づいた)」は用法に支持されない。また,「近づいた」のではなく「座り込んだ」のであるから R° は地面にいたと思われ, 王女の顔を上向かせる (後出) ことから, 幌付きの荷台の上に座っていたとし, *śákaṭa-*「荷車」を **sa-kaṭa-*「蓆, 即ち幌付きの」から導く根拠とする JANERT 等の主張は無理。経過説明の文を節約する文体からは R° が座ったままでいたとも, 王女が立ったままとも解らないし, むしろ不自然。[窮迫時の婆羅門に許される運搬業の意での *śakaṭa-* Yāska Ⅵ 5 etc. 参照。]

14) *arā3(i)* の Pluti につき *asāv ahaṃ bho3 iti* PārGṛSū Ⅱ 2,18等を参照。

15) OERTEL, Syntax of Cases 78参照。

16) *ahahāre tvā śūdra tavaiva saha gobhir astu.* BÖHTLINGK, LÜDERS, HAUSCHILD は *ahahă+are+tvā* の構文 (侮蔑・罵りの *dhik*+Akk.「ふん, …め！」の型) としつつも, *śūdra* の後で文を切り, *astu* の主語に苦慮する。しかし, 全体で完結した一文である, cf. ChU Ⅶ 15,2 *dhik tvāstu;* 更に *ahahā bālalapanā* Jātaka Ⅲ p. 450,9 (Śloka; *bā°* の性・格は不確定なるも DUTOIT Ⅲ 495: "Weh über eure dummen Reden"), *hā Devadattam* etc. (SPEIJER Skt.Synt. 327 Rem.2を見よ) 参照。

17) GOTŌ I. Präs. 279 n. 648を見よ (WERBA 42 n. 36に更に他見解の列挙あり)。

18)「Raikva の翼」または「R° の Parṇa (=Palāśa) 樹」。

19) 火・太陽・月・水及び風は *devāḥ*「神々」, 言語機能から気息までの五者は *prāṇāḥ*「生体諸機能」(元来は ellipt. Pl.「気息たち」, cf. DELBRÜCK 600, HOFFMANN 387f., WERBA 37 n. 19) であるからⅣ 3,2.3 でともに *etān sarvān* (m.) で受けられる。

20) 特に LÜDERS 375f. 参照；更に人名 *Sāṃvargajitā Gotamāḥ* DrāhyŚrSū Ⅷ 3,37。

21) *-ya-* による Int. (常に Med.) は語根のもつ性質 (自：他動, 行為：経過など) をそのまま受け継ぐので,「～の回りで繰り返し立ち働く, 給仕をしている」意味。

22) HAUSCHILD 363 は主題との関係が乏しいとして, 考察を打ち切っている。

23) 4で割り切れる「手」kṛta は即ち4と, 更に下位三者を取り込んだ10 (4+3+2+1) と等置される。10, *virā́j-*なる女性原理, 食物の同置は既に確立 (特に JB Ⅲ 42)。

24) 更に *Priya- Jānaśruteya- Kāṇḍvīya-* JB Ⅰ 22-24 参照。古い時代に舞台設定されていれば, Up. の時代を直接反映はしない。

25) P° は無邪気さを寓意して作者が *putrá-*「息子, 子供」から創作か。実名を避けたものか, *Janaśruta-*「人々の間に聞えある」, *Jānaśruteya-*「*Jānaśruti-* の息子, *Janaśruta-*の子孫」はあるが, *Jānaśruti-*「*Janaśruta-*の息子」そのものは見出せない。

26) テクストの異読 *rayikva-*をも参照。R° 自体は *réku-* (RV に二度 *réku padám*「残された足跡」, ただし既存の解釈は異なる) からの Vṛddhi-派生であろう。

27) 鳥の予知能力や鳥占いに関する観念が背景にあるかも知れない。

〈キーワード〉Veda, Upaniṣad, Chāndogya-Upaniṣad, saṃvargavidyā, Raikva

(大阪大学助教授, Dr.phil.)

伏見誠

MBh XII 69.32–71(平成8年 10月 11日)

防火

tṛṇachannāni veśmāni paṅkenāpi pralepayet /12.69.45ab/
草で覆われた住まいに，泥も塗り付けさせるべきである。

nirharec ca tṛṇam māse caitre vahnibhayāt puraḥ //12.69.45cd/
チャイトラ月には，火の恐れからあらかじめ草を取り除くべきである。

naktam eva ca bhaktāni pācayeta narādhipaḥ /12.69.46ab/
そして夜のみ王は食べ物を調理させるべきである。

na divāgnir jvaled gehe varjayitvāgnihotrikam //12.69.46cd/
agnihotra 祭用のものを除いて，日中に家で火が燃え上がってはならない。

karmārāriṣṭaśālāsu jvaled agniḥ samāhitaḥ /12.69.47ab/
鍛冶屋の仕事小屋で火は集中して燃え上がるべきである。

gṛhāṇi ca praviśyātha vidheyaḥ syād dhutāśanaḥ //12.69.47cd/
そして家に入って，それから火が定められるべきである。

mahādaṇḍaś ca tasya syād yasyāgnir vai divā bhavet /12.69.48ab/
もしある者に日中に火があることがあれば，その者には大罰があるべきである。

praghoṣayed athaivaṃ ca rakṣaṇārtham purasya vai //12.69.48cd/
そのようにお触れを出すべきである。都城の守護のためである。

雑

bhikṣukāṃś cākrikāṃś caiva kṣībonmattān kuśīlavān /12.69.49ab/
乞食達と陶工達とを，酔っぱらい・気違い達を，役者達を，

bāhyān kuryān naraśreṣṭha doṣāya syur hi te 'nyathā //12.69.49cd/
外部にあるものと為すべきである，人の最勝者よ，さもなければ彼らは害になるだろうから。

catvareṣu ca tīrtheṣu sabhāsv āvasatheṣu ca /12.69.50ab/
衢で，渡し場で，集会場で，宿泊所で，

yathārhavarṇam praṇidhim kuryāt sarvatra pārthivaḥ //12.69.50cd/
あらゆるところで王はふさわしい姿をしたもの達を諜報員にするべきである。

viśālān rājamārgāṃś ca kārayeta narādhipaḥ /12.69.51ab/
幅広き王道を，王は作らせるべきである。